日本女医会誌
復刊第49号

年頭に思う

会長　三神美和

明けましておめでとうございます。会員の皆様には定めしよい新年を迎えられたこととおよろこび申し上げます。本会も皆様のご活躍のおかげで国内的にも国際的にも注目を浴びてまいりましたことは誠に喜ばしいことであります。今年も一致協力して女医の団体としての真価を発揮したいものと希っております。

今年は五月社団法人としての第三回目の総会が仁瓶先生のお骨折で静岡で催されますし、九月には巴里で国際女医会が開催されることになっております。志を同じくする人びとが共に集り、共に語り研究することは何と楽しく有意義なことでありましょう。

昨年の高知の総会は、四国あげての御協力によって文字通り大盛会でありました。支部が活躍しておられる所は、何をやっていただいても一生懸命にご協力下さいます。高知県は支部長窪先生を助けて会員がよくまとまっておられますので、万博の時も数多くのルーペンダンをさばき、資金面においても、また労力の面においても本当によくやって下さいました。そして総会はあのような成功をおさめられたのであります。今年の総会地静岡もいつもよくご協力下さいます。昨年行われた参議院議員選挙でのご活躍は目を見張るものがありました。そして遂に川野辺先生の当選をかち得たのであります。仁瓶先生を始め多くの日本女医会員の方々は手弁当で惜しみなく運動され、遂に病に倒れた方もある程でした。このような熱意ある会員のおられる静岡は、その故にこそ総会の候補地となり、お引受け頂いたのでありますが、必ずや皆様のご満足のゆく会を持って下さることと思います。

奮って御参加下さいますようお願い申し上げます。

九月の国際女医会には多数ご参加下され、うれしいことであります。会議場の一翼は日本女医会員で埋まるのではないかと今からその壮観が目に見えるようであります。今度の国際会議は大関心事である一九七六年の総会を日本に誘致できるかどうか、小野先生が国際女医会々長に選ばれるかどうかの大事な総会でありますので、このように多数のご出席を得たことは誠に力強いことであります。出席した以上あまり会議場をボイコットすることなく、国際会議の雰囲気を味わってきて下さい。それと同時に教養ある女性としてみんな仲よく外国旅行を楽しんできて下さい。とかく多人数となるとまとまりにくいのが世の常ですが、各人が団体の一員として行動されることを切望しております。

学会の演題であるトキソプラスモージスについては、女医会の方々でも研究されている方が多くおられ、名古屋の佐藤先生も多数例血清免疫反応について検査され、また東京女子医大産婦人科でも、大内先生や吉田先生など先天性トキソプラスモージスについて研究されておられます。また東京女子医大でも寄生虫学教室が早くよりこれを手がけ、また眼科、小児科などもその研究業績を出されております。今度は寄生虫学教室と共同で検索した私どものところの成績を総会へ出させて頂き採択されました。「日本におけるトキソプラスモージスの感染径路」と題し、主として伊豆七島を中心として調査した成績であります。限られた演題数のことと、一つだけ採択されましたが、いずれテーブルジスカッションもあるようですから、その際討論に加わって頂き、日本における研究を外国の方に知って頂きたいと思っております。

週刊紙、テレビ、映画、至るところに性の氾らんがあり、世界的傾向とはいえ困ったものだと思います。正しい性教育はひいては民族の発展につながるものとの観点に立って日本女医会が性教育の問題をとり上げたのは当を得たものと思います。女性を守るために、母親を守るために、私共女医がこれに手をかすことはその立場上最も適した仕事だと思います。各地域毎に早くからこの問題にとり組んでおられますので、猫の目のように変る世の中の情勢を正しく把握して、性教育の基準をうち立てるようご協力をお願い申し上げます。今年の大きな課題の一つとしてこの問題について更に推進して参りたいと存じます。

本会も会員数も次第に増してはおりますが、色々の事業をやっていく上に、とても予算が足りません。いつも申し上げますように、年金の加入者をもっと増していくことが、資金源として最もよい方法だと存じますので、何卒奮って年金に御加入下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

今年もまた日本女医会にとってよい年でありますように希って筆を擱きます。

次期総会開催について

支部長　仁瓶礼子

第十六回日本女医会総会が昭和四十六年五月に高知市で盛大に開催されました。

その節次期総会の開催地として静岡県が候補になっていることを承り、県内の会員の方々ともご相談の上お引受けすることになりました。高知県の総会はすべてデラックスでその上、きめ細かい行き届いたサービスには出席された会員の諸先生が等しく感嘆したことでした。

こちらはトテモそのようなわけには行きそうにもございませんが、それをご了解頂いた上でお引受けいたしたわけでございます。

しかし私共は私共なりにベストをつくす考えでございます。

日時は昭和四十七年五月十四日（日曜日）

会場は熱海市のニュー富士屋ホテルと決定いたしました。

十四日は総会につづいて懇親会があり、閉会のあとそのままご一泊頂いて翌十五日は朝から観光旅行ということになります。

観光旅行のスケジュールは

一コース　熱海→箱根

二コース　富士山五合目登山→富士五

湖巡り→修善寺温泉（希望者は一泊）

三コース　熱海→静岡近郊巡り→浜名湖→館山寺（一泊）

大体右の三つのコースを企画いたしました。経費、所要時間など詳細は過日お手元にご通知申上げたとおりです。

目下県会員が打って一丸となってよい総会が持たれますよう努力いたしております。

馴れない仕事でございますし、また本職のかたわらですので仲々大変でございますが、皆一生懸命やっておりますので、諸先生方には是非是非ご参加下さいますようお願いいたします。

何はともあれ、麗峰富士山が皆さまを歓迎申し上げることでございましょう。

両親と藤倉学園と私と

川田仁子

開成中学校に学び、医者になるはずの川田貞治郎は基督者となり青山学院に転校したために勘当されドイツ普及福音神学校を卒業したのち水戸市外渡里村で日本心育園を創立し精神薄弱の人に教育、訓練をしていた。栃木県真岡の医者の娘満川とくは医者になりたい音楽家になりたいなどいづれも親の反対にあい宇都宮第一高女を出た後、これも基督者になり聖書学院を卒業してから結婚し、二人で精薄の人のために努めたが指導上の行き詰まりから父は米国へ留学し、ペンシルバニアに学ぶ中に第一次世界大戦、止むを得ずワインランド・トレーニングスクールで実習し帰国した。その間、母はアルウィン女史の創設した玉成保母学校に学び、後にフレンド幼稚園に勤めつつ夫の帰国時には二万円を与え給えと祈っていたという。

藤倉電線の中内春吉氏は大戦に依り儲けた事から母堂への思慕も含めて、社会事業への寄附金を思いつかれ当時の井上東京府知事、日本最初の精薄施設の石井滝の川学園長の口添で父が頂く事となり、金子は出すが口は出さないという約束で金二十二万円の基本金で大正八年財団法人藤倉学園が創立された。

私は施設の中で生まれ、父母をパパ、ママと呼ぶ精薄の人達と一緒に育ったが、この人達の役に立とうなどと思った記憶は無いが就学前から、医者になる、と独りで決めていたようである。

昭和十年ごろか母が賞をいただいて宮家に招かれ同席の吉岡弥生先生から女医にするなら東京女子医専とすすめられたときく。昭和十八年卒業後、学生時代から保証人を願っていた内村祐之先生の教をうけたく東大の精神科教室に入れていただいたが戦争は益々激しく軍のために大島の施設を立ち退く必要に迫まられ、買い求めた清里村の清泉寮へ三十人の子供達と移らねばならなった。精薄に対する偏見も強く、加えて疎開者であり、穀つぶしよ、早く殺してはどうかの声もあった。栄養失調で何人もが死に、無医村なので、私は卒業後一年でも診療をしなくてはならなかった。この頃が一生の中で最も苦しく辛い時代であった。清泉寮は終戦後、米国のP少佐に依り強制的に返す事を強いられたがこの交渉には東大精神科教室の一年後輩の神谷（前田）美恵子氏が当たって下さり私のあとに村に来た医者は僻地診療者として今回受賞された植松喜久枝氏である。

学園が大島に帰り、脊椎カリエスのため担架で清里に移り大島に戻って感謝しつつ召天した母を見送り私は大学の教室での生活を再び始めた。

母校の精神科教授西丸四方先生の下で二年程やってみた。そのころ、オールドミスに終止符をうち結婚したのだが、嫁ぎ先の戦前の主治医は荒川あや先生とご主人であり、数年前入った東京パイロットクラブの前会長が龍知恵子先生であり、いろいろと縁の深い窪敦子先生が支部長の高知で賞をうけて…。縁の深さに今更おどろいている。

精神薄弱の問題は今や重症とか重度に移っているようである。私が対象としている子供達は、大島の四万坪の土地に六十人、多摩の三千坪の土地に七十人、職員は合わせて五十人という小さなものである。戦前は日本中に七か所の中の一つとして、やや特異な、比較的裕福な施設であったのだが、今やこの種の施設が六百か所もあるという事で忘れ去られそうである。国及び都からは一人当たり一か月三万五千円程度があたえられているがこれらは衣食住の他に職員の俸給、建物の修理等すべての経費がこれにふくまれており、被服費はひと月二千円位かかり、火災保険、退職金とうはこれに含まれてはいない。不動産は一億円、負債は八百万円というのが現在の財産状況である。

重度や重症の子供達と違って私どもの子供達の一部は就職もし、更にその一部は結婚さえもする。社会学的に見ると未だこの仕事の必要性を感ずるのだが世の中の関心は低く小さく同窓の人々も友人までも理解して下さる方は少ない。

施設の中に生まれながら、また、精神科医になりながら、これらに飽き疲れなどして結婚に逃げたにも拘らず両親の死後、再び学園の面倒をみなくてはならなくなった私、医者になる事も精神科を選んだ事も全て自ら選び、自分で切り開いて来たと確信していたのに今、静かに思うとき大きな流れの中に漂う木の葉のような私であったと思う。

寄宿舎の五年間に親しんだ人々。母校を手伝った時に触れあった先輩や後輩たち……。その数は千人にも及ぶのではないだろうか。それらの方々の見えない力で、やっと今日まで覚束ない歩みを続けて来たものと思う。

このたびの賞はこの小さな仕事を女医の方々が認めて下さったという意味で貴重であると感謝してうけさせていただいた。賞金については父の精神薄弱に対する教育的治療法のまとめに使わせて頂く予定なので紙上を借りて厚くお礼を申し上げる。

（社会福祉法人　藤倉学園代表理事）

冬の北海道だより
（オホーツク小旅行）

北海道支部長　岡嶋喜代子

今年の札幌はオリンピックで年が明けました。やがて笠谷選手などの好記録が皆様を湧かせることでしょう。

先日寸暇を得て、日頃鬱積する雑念の整理にオホーツク海の流氷で頭を冷やすも一興かと思い切って札幌脱出を試みましたので氷点下の旅に皆様をご案内いたします。

真白な大雪連峰を眺め、旭川をすぎる頃から列車の屋根のしずくが窓ガラスに氷となり、外も見えなくなりました。遠軽で乗換え札幌から六時間余りオホーツク海に臨むアイス呼名の小駅をいくつか通過し、やがて蓮葉状の結氷した波打ちに真白に凍った佐呂間湖の展望が開かれました。この佐呂間にご主人と共に産・外・小・内科を開業しておられる今野タイ先生（東女医）をお訪ね致しました。ご尊父様の代から数十年、この北辺の地にしっかりと

根をおろし、地域医療にとけ込んでいられる貴重なお話を伺うことができましたので、一筆書き添えることにいたしましょう。

先生は当地区の幼稚園、広域十数校の小学校の予防接種から検診と、まさしく分娩から老後まで、全住民の健康管理をひきうけられ、湧網線沿いの子供の顔はほとんど、どこそこの誰の子供と覚え、たまたま知らない子供をみると最近転入した家族だったといわれるくらい密着した診療ぶりでいられます。またどんなに町政やもろもろの名誉職の勧誘があっても、辞退され医療こそが他人の真似のできない住民への奉仕だという使命感を貫ぬかれているというお話をいきいきとされるのを伺って、道内ではとかく経験未熟の若い医師が法外な高額で地方に迎えられ、〃先生サマ〃と下にもおかぬ丁重な扱いをうけるうちに、いつしか傲慢な態度が身につき地域の人々のひんしゅくをかっているのをきく中で、先生のお話は久しぶりに清涼剤をのんだような清々しさを覚えました。

ただ子供さん方の教育には大そう御苦心なされた由、それだけに一そう頭の下がる思いをしながら辞退いたしました。

翌日は至極おうような旅館を出て、真白に氷のはりつめた佐呂間湖のほとりの知人を訪ね、その柵のむこうは牧場、その先が湖、それからオホーツク海と白一色の中にも、それとわかるわづかな目印を指しての説明に、肌を刺す寒風の中で大自然を満喫。氷下漁でとれた魚や、帆立貝の御馳走をいただきました。

ここでは年毎に増えるカニ族が、冬任度の薪や農作物、はては住民の好意で建てた便所、水揚ポンプに至るまで形ないまでに盗っていく話をきき、また道を尋ねる見知らぬ観光客にも湖を賞でてくれる人と思えば自宅で食事の接待も惜しまないという善意の人々の住む町だけに、やりきれないわびしさを味わされ、これも公害の一つかしらと思いました。

帰途は遠軽の家庭学校に立寄り、数百万坪の原生林の中で実践と教育を通して、たくましく社会に巣立っていく少年と元気な挨拶を交してオホーツク海をあとにしました。

車中この小旅行を反すうしながら、二日と医院を空けられないといわれる多忙な今野先生の物欲をはなれ地域医療にとけ込まれている綽々たる態度、医師としての本道を闊歩される先生のお姿を思い、都会には薄れいく医師と患者との心の絆、信頼感、人と人との温かい交感がお言葉の端々に溢れているのを感じながら、両先生のお人柄によることながら、氷点下三十度にもさがるという冬は勿論、交通不便な四季を通じての厳しい自然条件の中で、この自然とともに歩み、堪えてこられた自己との闘いの中で育まれたものでなかろうかと、おこがましい推測をしながら札幌に帰りつきました。

自然を破壊しつつ、オリンピックに便乗した高速道路、地下鉄、高層ビルなどをみていると、自然のみならず人もまた自ら傷つき、これからのために、今まで何人かの人が心の傷をうけたり、これからも何人かの人の生命がおびやかされることだろうと思うと、都会というものがいかにも、虚大な形骸にしかすぎないものに見え、今さらながら冷たいものが背筋を走るのを覚えました。

かつての〃アカシヤの時計台〃〃羊群声なく牧舎に帰る……〃とうたわれた詩情豊かな札幌も、今や紙上に残る感傷となりつつあるようです。

故福田幹子先生の想い出

倉田みね子

昭和四十七年春まだ浅き一月十三日突如として先生は逝かれました。全夜おそく御息女の律子様から御訃音をうけておどろいて胸のつぶれる想いがしました。先生のご健康を予期して明日は上京し、また積るお話をしようと切符を買求めて用意してあったのにと、自分で自分に言いきかせ、異身伝身とまで考えさせられました。律子様も不審の事だと電話でおどろいておられました。私たちは明治四十四年に医者になり、数えれば六十一年になります。

先生とはこれ以前、女医学校に在学中、女医界の編集員になった事があり、当時御親交にしていただきました。学校卒業後はただちに環境も異り疎遠になっておりましたが、偶々竹内先生のおきもいりで第一回の明治会を催していただいた時から昔がたりに花がさき友情が再燃したとでも申しますか再び先生と御別懇になりました。省みますれば六十一年は人も還暦祝の年で決して短い年月ではないのに別に長いとは思えないといつも先生と話しました。

しかし、八十三才の今、過去を振り返って見ますと各々その通った道程は決して平坦ではありませんでした。先生も御良人様の御早逝もありお子様方の御教育から戦災による御住宅の灰燼化など筆紙に尽されぬ御苦労の中を雄々しく切りぬけてお三人のお子様も成人され、皆さんからいつくしまれまた御立派なお家も建てられた真の成功者であります。

先生はその御性格が卒直で思う事をズバリ言う方ですが御交際している内に先生の御真価がわかり、皆さんから親しまれ信頼され尊敬されます。また先輩の故人の先生方を尊敬し、あの方のああいう所がよかったとか、こういう処がよかったとかそれぞれの先生方をほめて話されました。特に竹内茂代先生にはいろいろ御親切に御指導いただいたり困った時に扶けていただいたと感謝して話しておられました。是非一度竹内先生をおたづねしたいものだと常にいっておられました。

御葬儀の時竹内先生の供えられたお生花を見てその事を想い出し御焼香しながら胸がせまりました。また先生はだれかれの区別なく情深くて依頼されれば懸命にその方のために力を惜しまず努力する方で、現世の人にだけでなく故友人の子供さんや孫さん達にまで故人同様の情をかけいつくしんでおられました。このようなことは真似のできない先生の御徳であると感じております。

先生は人にほどこす主義で、榛八郎さんは松本出身の方だから読みなさいと送って下すったり、医家芸術を送って下さって思わず諸先生方の随想や詩や短歌を拝見でき、たのしく読ませていただいた事もありました。兎に角先生の友情の表現は拙ない筆では書きつくされません。こんなよい友人とまた逢う日がない事は、かえすがえすも悲しい事ですが生者必滅の条理には逆えません。

ただ晩年の先生は世の中のすべてを達観し、悔ゆる事なくその日その日をゆたかにお子様にゆだねて悠々自適の途を辿られたのです。苦しみもなく最后を飾って去られた事は正に績善余慶の御仏の加護であったのだろうと思い御冥福をお祈り申し上げて御棺にお別れいたしました。

三多摩支部会に出席して

三多摩支部　小川昭子

日本女医会三多摩支部の会員は、昭和四十六年十一月七日(日)秋川渓谷の清流閣で開かれた支部会に出席した。

朝十時立川駅に集合した一同は、娘時代に返ったような気分で大はしゃぎであった。五日市に着いた頃から雨模様になったが、童心に帰った私共には雨など全くこたえなかった。更に迎えのバスで清流園まで行ったのだが、長い石段を降り、つり橋を渡った時、雨のため却って風景におもむきが加わったように思え、天気が悪いことさえ嬉しく感じた。秋雨に洗われた渓谷の紅葉は、洗われるような美しさであった。

会場では山本スギ先生や、副会長の山崎、小俣両先生を加え、約二十名が心のこもった山菜料理をいただいた。食事をしながら一同大いに観談し、若い日の思い出話や、現在の苦労話、さらに、現在の医療問題の批判など、時間の経つのも忘れて語り合った。お蔭で一同いろいろ勉強にもなり、リクリエーションとしても素晴らしかった。

連日各地区で人の命をあづかるという重い責任を背負いて活躍している私共に、また翌日から大いに働らくエネルギーと、新鮮な生きがいとを与えてくれた一剤であったと思う。

この会をすべてお世話下さった五日市の野口先生のお取計らいで、大きなコンニャクのお土産も楽しく、一同別れを惜しみ乍ら、帰途についたのであった。

理事会議事録

日時　昭和四十六年十一月二十八日
場所　日本女医会々議室

出席者（敬称略）
三神・小俣・川那部・山崎・大原・小野・久保田・上田・中川・中西・丸山・森・守安・阿部・石田・綾仁・荒川・稲葉・佐藤・佐野・鈴木・長池・橋本・福永・松岡・真鍋・森川・山口・山本・湯本・佐藤・添田・八木

欠席者（敬称略）
柳瀬・栗原・戸田・中村・白橋

一、報告事項　森　理事
・労働者婦人少年局会議（10・25）に中川富士出席。
・第12回P・P・O国際会議（1972・1・10～1・22、於ニュージーランド、オークランド）に山崎倫子副会長が団長として出席する（テーマ汎太平洋東南アジア地方における家庭の問題について）。
・吉岡賞推薦依頼状を発送（11・25）
・講習会（消化器疾患の診断）についての報告あり、
・年末ヨーロッパ旅行あっせんの件
・ルーペンダン（老人の日の贈りもの）の礼状多数あり。

二、会計報告　中西　理事
46・10月分会計報告別紙のとおり。

三、議題
①定款施行規則（第二条選挙）改正案について小俣副会長より改正案（再）について説明あり。
・第四条については山崎、松岡、橋本、石田、森川、稲葉より各々発言あり、検討の結果「理事は総会で、至誠会、鶴風会、加多乃会より、それぞれ九名、その他の同窓会より二名、その他の理事六名は点数順に選出する」という原則だけを賛成多数にて承認。
・第十三条「理事の選挙は、十五名連記とする」
・第十五条「会長は選出された理事の中から理事が会長候補を選出し総会で出席会員が選出する」
・第十七条「定数を越えるものおよびみたないもの」
・第二十四条「理事、監事に欠員が生じたときは、次年度総会において選出する」
以上多数決にて承認する。

②国際女医会（第十三回）について
佐野アヤ子　国際女医会々議演題（三神小山両教授）は、十月五日付で受理された、その後東京医大第二病院（吉田）より演題の提出あり、連絡中であるとの報告があった。

③事務所移転についての件
至誠会借室の件に関しては、反対説（橋本）これに対し、社団法人至誠会理事会では、ほとんど全部借室をつくることに対し、反対であるとの発言（阿部）もあった。
その他東洋信販の借室について（山崎）
阪和興業ビル内借室（新富町一ノ七ノ四）の件について（守安）の発言もあった。
現時点で、本会事務所を外に移転するか、至誠会館内借室にするかとの採決の結果、八対十三で後者に決定す。しかしあくまで暫定的で新日本医師会館内の借室の件を、時に臨み武見医師会長にお願いすることを前提として決定した。

④性教育に関して　湯本　理事
書籍の件、学校保健大会に出席された報告。タンポン、カップ、東京12チャンネルなどについては、山崎、阿部、長池、各理事により、多彩な雑談的討議があった。

ⓗその他
・ルーペンダン新製品広告の件　佐藤　理事
・事務員賞与について
・山本　杉理事の挨拶
その節は、種々お世話になったが、申しわけなき結果であった。失礼を重ねたが、お許し願いたいとお礼の挨拶があった。
・稲葉理事より罹災見舞に対してのお礼の挨拶があった。（文責　森）

ルーペンダン
（実用新案特許登録）

★からくさ
シルバー製　九千八百円（鎖付）
十八金製　一万四千九百円
★デラックス
シルバー製　九千八百円（鎖付）
十八金製　一万四千八百円
★プレン
シルバー製　八千円（鎖付）
十八金製　一万二千円
★ペンダント型　金色枠　三千円
銀色枠　二千円
★クリップ型　金色枠　二千円
銀色枠　二千円
★何れも郵送料共の価格にて従来通りペンダント型、クリップ型に限り本会々員は右価格の一割引きです。

編集後記

新年号としてはいささか発行が遅れました。年金その他を本紙に掲載する準備とうのためであったので、ご了承いただきたい。

今年の総会は静岡でおこなわれる。支部長の仁瓶先生もおかき下さっているように揃って出席し、盛会にいたしましょう。

ルーペンダンがなかなかよく売れる。うれしい事である。つきまして事業部の佐藤千代子理事が記事をかいて下さったが紙面の都合で一部分しか掲載できなかったが、皆様ルーペンダンにごひいきのほどお願いいたします。

福田幹子先生が本年一月十三日にお亡くなりになりました。永らく日本女医会を熱愛して下さった先生のごめいふくを心からお祈り申し上げます。（久保田）

昭和四十七年二月十日印刷
昭和四十七年二月十五日発行
編集人　久保田くら
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ケ谷河田町19
社団法人　日本女医会
TEL（341）〇九六八
印刷所　東京都港区白金五-四-一
興栄美術印刷株式会社
題字　吉岡弥生